

いっただら

ESSAY

倉元 信行

24

小 箱

焼きもの造りは気ままである。気が乗らないと何ヶ月も放っておくし、20キロの土で一気にお皿を何十枚と造ったりもする。造る時は音楽をジャンジャンかけ、ビールを飲みながらというのがいつもの姿である。

スピーカーから流すのはグールドのピアノに限らずポピュラー、演歌、気分次第で何でもかける。ジャンルに依らずいいものはいい。

ミュージカル、「キャッツ」をかけたリズミに乗って手際まで良くなるような気がする。キャッツはロンドン版、ブロードウェイ版、劇団四季版とそれぞれに楽しい。

根を詰めないでねと妻はよく言うが、根を詰めないでいい仕事はできない。

ビールを飲んではいいても、手を抜けないところはきっちりとやらないと土は正直だ。

志野の傍ら夢中になったのが小箱造りだった。

お茶の道具で言えば香合である。

いろんな形の箱を造ってみたが、最後にひとつ行き着いたのが七角形の箱である。頭で考えると四角形や六角形が一番落ち着きそうな気がするが七角形は味わいがある。この造り方は結構ユニークなものである。

道具は、かまぼこ板2枚とカッターナイフ、短い定規にカンナとヘラが

一つづつ。

適当な量の土の固まりを回転させながら1枚のかまぼこ板上からと横からたたき、七角形の箱の形にする。真ん中を少し盛り上げた方が姿がよい。

数分あれば最終形状に仕上がる。

これを、かまぼこ板をタタラ代わりにして上下に糸で切り分ける。切り糸が抜ける辺には必ず当て土をして変形を防ぐ。

ふたはそのまま、底は裏返しにしてヘアドライヤーで数分、手に取って細工ができるほどにまで表面だけを乾燥する。

あとは削るだけである。まず、ふたの方を約3ミリ幅の縁を残してヘラで掘っていく。定規を当てナイフで各辺の縁取りの見当を入れておくのが早くきれいに仕上げるコツである。

次は底で、こちらは先ず上ふたとの合わせの段を作る。定規を当て、L型カンナで縁を落とす。辺の最後にカンナが抜ける時、指を

押し当て変形しないようにしておくのが大事である。箱は少しの変形でも焼き上がった時のガタつきの原因になる。

上ふたを重ねてぴったり合うように修正すれば、縁の出来上がり。底に押印した後、ふたと全く同じように中をくり抜く。こうして最初の土の固まりから約50分で箱は完成する。

私の考案したこの手順は最も短時間で箱を仕上げる方法だと思っている。

短時間でできるという事はシンプルな方法であるという事である。

最終的に得られるものが同じならできるだけシンプルな道筋をたどった方が良いのは、箱づくりに限らず化学の合成でも、組み立て型の製造でも何にでも共通する大切な事だろう。

複雑な経路をたどったものほど、悪い結果が出た時に原因がつかみ難い。

最近凝っているお皿造りも、私のやり方は

手作りには人がびっくりするほどの速さである。家で使っているお皿を使った一種の型抜き法なのだが、プロが見ると邪道と言うかもしれない。

みんなで開いた一昨年の展示会では、小箱ばかり数十個を並べてみた。志野あり、黄瀬戸あり、色絵、金銀彩ありと、七角形の箱はその存在感を見せていた。

